



Title	動詞の第二中止形が表す意味 : アスペクトと動詞のタイプに注目して
Author(s)	森田, 耕平
Citation	阪大日本語研究. 2015, 27, p. 83-108
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/51520">https://doi.org/10.18910/51520</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 動詞の第二中止形が表す意味 —アスペクトと動詞のタイプに注目して—

### Meanings of the second non-finite form of verbs: Focusing on aspect and verb types

森田 耕平  
MORITA Kohei

キーワード：第二中止形、副次的な意味、定形動詞、アスペクト、動詞のタイプ

#### 要旨

本稿は、主に以下の点を記述することを目的としたものである。

- ① シテ形式の意味のあり方が定形動詞のアスペクトと相関している場合がある。
- ② 定形動詞のアスペクトによって意味のあり方の異なりが典型的に現れるのは、シテ形式が主体動作客体変化動詞の場合である。定形動詞が継続相の場合、シテ形式は、時間的に先行する主体動作の側面は背景化させて、主要な事象に対して〈客体の結果状態の同時性〉を表す。定形動詞が完成相の場合、二つの動作は継起的になるが、シテ形式は単に先行する動作を表すのではなく、〈主体の動作の先行性と客体の結果状態の同時性〉を表す。
- ③ 定形動詞のアスペクトと時間構造の側面に関わらずシテ形式に共通しているのは、奥田(1989)が指摘しているように、定形動詞が表す主要な事象に対して、シテ形式が副次的な事象(動作や結果状態)を表す点である。特に主体動作客体変化動詞では、定形動詞が表す主要な事象を成立させるための、意図的に準備された客体の結果状態という副次的な意味が前面化する。

#### 1. はじめに

本稿は、動詞の第二中止形(以下シテ形式と表す)が用いられる文を対象に、〈定形動詞<sup>1)</sup>のアスペクト〉と〈シテ形式の動詞のタイプ<sup>2)</sup>〉に注目して、シテ形式が主体動作客体変化動詞である場合を分析する。これらの観点はシテ形式が表す意味の記述にとって基本的な特徴であると思われるが、後述するように、先行研究では十分に検討されていない。

本稿は、第一に、〈定形動詞のアスペクト〉によって二つの事象の時間関係が表し分けられ、シテ形式の意味のあり方が異なるという事実注目する。次の(a)(b)を見られたい(以下出典のない用例はすべて作例である)。

(a) 太郎は新聞をひろげて、ゆっくり読んでいた。〈定形動詞=継続相〉

(b) 太郎は新聞をひろげて、ゆっくり読んだ。      〈定形動詞＝完成相〉

これらの例では、シテ形式と定形動詞の組み合わせは同じである。しかし、定形動詞が (a) 継続相であるか (b) 完成相であるかによって、二つの事象が同時的であるか継起的か、という時間関係が異なる。より正確に言うと、シテ形式が (a) 先行する〈主体の動作〉の側面を背景化させて〈客体の結果状態の同時性〉を表すか、(b) 〈主体の動作〉の側面を前面化させて〈主体の動作の先行性〉と〈客体の結果状態の同時性〉の両面を表すかという意味のあり方が異なっているのである。そして、このような異なりには、シテ形式の〈動詞のタイプ〉が関与している。すなわち、シテ形式が主体の動作と客体の変化の両側面を表す〈主体動作客体変化動詞〉の場合において、最も典型的に違いが現れる。

本稿は、第二に、時間関係の異なりに関わらずシテ形式が動詞のタイプに対応した意味を表すという事実に着目する。奥田(1989)は、シテ形式が定形動詞の表す主要な事象に対して副次的な事象を表すことを指摘している。本稿は基本的に奥田(1989)の立場に従い、副次的な事象が表すさまざまな意味を〈副次的な意味〉としておくことにする。本稿が対象とする主体動作客体変化動詞の場合、シテ形式は基本的に主要な事象のための〈意図的に準備された客体の結果状態〉を表す。定形動詞が完成相の場合、シテ形式は主体の動作の側面をも前面化して表すが、主たる事象のために客体の結果状態が準備されることには変わりがない。

本稿はこの点をふまえたうえで、主体動作客体変化動詞のシテ形式が副次的な事象として表す意味関係をとらえ、バリエーションを分類・タイプ化して記述する。具体的には、二つの動作の客体が (c) 同一であるか (d) 同一でないかという文構造と意味関係の異なりに従って、次のような二つのバリエーションを取り出す。

(c) 太郎は新聞をひろげて、ゆっくり読んでいた。      〈客体が同一〉

(d) 太郎は新聞をひろげて、爪を切っていた。      〈客体が同一でない〉

以下、2節では分析の観点について先行研究の立場とともに述べ、分析の対象を確認する。3節では用例を分析し、二つの事象の時間関係をふまえながら、シテ形式が表す副次的な意味のバリエーションを記述する。本稿が第一次的な分析において注目するのは定形動詞が継続相である用例だが、同じ用例で定形動詞が完成相の場合も考察することで、定形動詞のアスペクトによる意味のあり方の異なりについて確認する。

## 2. 分析の観点とその背景

本稿は次のような動機から、〈定形動詞のアスペクト〉と〈シテ形式の動詞のタイプ〉に注目して用例を分析する。

- ① 二つの動詞が表す事象の〈時間関係〉の違いには〈定形動詞のアスペクト〉が関与している。また、同じ定形動詞とのペアにおいてアスペクトによる違いが明確であるのは、〈シテ形式の動詞のタイプ〉が〈主体動作客体変化動詞〉の場合である。これらの事実は、従来の研究では明確に指摘されていない。
- ② 二つの事象の時間関係における異なり的一方で、動詞のタイプに対応した意味の共通性がある。従来の研究では、シテ形式が主体動作客体変化動詞の場合に表す意味が十分に記述されていない。

以下、それぞれの観点について研究の背景とともに述べる。

### 2.1. 二事象の時間関係と定形動詞のアスペクト

シテ形式の意味分析において、継起・同時という二つの事象の時間関係のあり方は主要な観点の一つである。遠藤（1982）、井上（1983）、加藤（1995）、仁田（1995）、内丸（2006）、吉永（2008）、三原（2011）などではシテ形式による意味関係そのものとして「継起」という分類を採っている。本稿も意味関係の記述にあたって二つの事象の時間関係に注目するが、その際、まず定形動詞のアスペクトに注目する。これは、以下に述べるような定形動詞のアスペクトと二つの事象の時間関係との文法的な対応を考慮するためである。

シテ形式の用例全体を対象に、定形動詞のアスペクトと事象の時間関係を観察すると、次のような関係があることがわかる。

- ① 定形動詞が継続相の場合は、二つの事象の時間関係は基本的に〈同時〉である。
- ② 定形動詞が完成相の場合は、〈同時〉の場合も〈継起〉の場合もある。

以下単純化して、主体が「ひと」である場合について典型例を示す。

まず①定形動詞が継続相の場合について、シテ形式が主体変化動詞の例（1）、主体動作客体変化動詞の再帰構造の例（2）、主体動作客体変化動詞の例（3）、主体動作動詞の例（4）を示す。

- (1) 太郎は縁側に座って、空を見ていた。〈同時＝主体の変化結果としての状態〉  
 (2) 太郎は背中を丸めて、空を見ていた。〈同時＝主体の変化結果としての状態〉  
 (3) 太郎は出窓を開けて、空を見ていた。〈同時＝客体の変化結果としての状態〉  
 (4) 太郎は肩を震わせて、空を見ていた。〈同時＝主体の動作〉

例(2)の主体動作客体変化動詞は再帰構造をとると主体変化動詞相当になる。例(1)(2)で主たる事象と〈主体の変化結果としての状態〉が同時的であるとすれば、例(3)では主たる事象と〈客体の変化結果としての状態〉との同時的関係が表されている<sup>3)</sup>。これらの場合、主体や客体における変化結果としての状態が主たる動作と同時的に存在しているが、動作自体は一つである。例(4)は変化結果ではなく〈主体の動作〉と主たる動作との同時(進行)的關係が表されている。

一方、②定形動詞が完成相の場合は、同じ動詞の組み合わせであっても、次のように継起性が明らかな場合がありえて、相対的に複雑である。

- (1') 太郎は縁側に座って、空を見た。〈継起<sup>4)</sup>〉  
 (2') 太郎は背中を丸めて、空を見た。〈同時〉  
 (3') 太郎は出窓を開けて、空を見た。〈継起〉  
 (4') 太郎は肩を震わせて、空を見た。〈同時〉

例(1')と例(2')では、主体変化動詞(および主体変化動詞に相当する主体動作客体変化動詞の再帰構造)であっても時間関係が異なり、定形動詞のAspectとの対応は一見不明確である<sup>5)</sup>。また例(4)(4')では、定形動詞のAspectに関わらず時間関係は同時的である。一方、例(3')の主体動作客体変化動詞の場合、二つの事象は継起的であり、同時的な例(3)との違いは定形動詞のAspectの異なりに連動している。

いま、このような定形動詞のAspectと二つの事象の時間関係の対応を全面的に明らかにすることはできない<sup>6)</sup>。しかし先行研究では、少なくとも例(3)(3')のような場合に定形動詞のAspectによって二つの事象の時間関係の異なりが(解釈や読みではなく)文法的に表し分けられるという事実について、管見の限り、明確な指摘がない。

井上(1983:133)は、シテ形式の意味として「継起」を取り出したうえで、継起性のない「道具(または付帯状況)」が「一時的なものか、継続的なものかは、S<sub>2</sub>の述語が継続を表すかどうかによって決まる」と述べるが、それはS<sub>2</sub>の述語のAspectによって二つの事象の時間関係が表し分けられるということではなく、「道具(付帯状況)」の一時性と継続性が[±継続]

という意味素性によって区別されるということである。このほか、遠藤（1982：53-54）、坂井（2000）、加藤（2003）<sup>7)</sup>のように二つの動詞の関係に注目して時間関係を区別するものにおいても、吉永（2008：31-45）、吉田（2012：50-53）のようにシテ形式のアスペクト的側面に注目して分析するものにおいても、定形動詞のアスペクトの時間関係の構成への関与には言及がない。

本稿は、定形動詞のアスペクトによる二つの事象の時間関係の異なりが明らかである主体動作客体変化動詞の場合に注目し、まず、例（3）のように定形動詞が継続相である場合を分析する。そうすることで、従来の分類ではとらえられていない意味の側面に接近し、例（3'）のように単に継起的とされる例についても、新たな視点で分析することができると考える。結論を先取りすれば、例（3'）では、シテ形式が主たる事象に対して、主体の動作の先行性と客体の結果状態の同時性の両面を表しているという複合的な関係がとらえられる。

## 2.2. 意味関係の記述の枠組みと動詞のタイプ

上掲の例（3）（3'）は時間関係の面では異なるが、これらがある意味関係を共有することは、シテ形式と定形動詞の組み合わせが同じであることから明らかである。次の例（5）（5'）と例（6）（6'）でも同様に、それぞれのペアに意味関係の共通性がある。

(5) 太郎は新聞をひろげて、爪を切っていた。

(5') 太郎は新聞をひろげて、爪を切った。

(6) 太郎は新聞をひろげて、ゆっくり読んでいた。

(6') 太郎は新聞をひろげて、ゆっくり読んだ。

一方で、例（5）と例（6）はシテ形式の動詞のタイプと時間関係の面では同じであるが、文の構造と意味関係の面では異なる。例（5）では「ひろげる」「切る」はそれぞれ「新聞」「爪」という別々の客体に対する別々の動作を表しているのに対し、例（6）では「新聞」が二つの動作に共通の客体であり、一つの客体に対する二つの動作が表されている。

このことは、同じ主体動作客体変化動詞というタイプであっても、文構造と意味関係にバリエーションがありうるという事実を示している。このような場合の意味関係を記述するには、第一に、時間関係における異なりと意味関係における共通性の双方をとらえたうえで、第二に、主体動作客体変化動詞という動詞タイプに注目するというアプローチが必要になる。後述するように、シテ形式の意味記述において「付帯状態」と「継起」を二分する立場では、時間関係の異なりが優先されるため、そのようなアプローチはとりにくい。

この点で、奥田（1989）の分析枠組みは示唆的である。奥田（1989）はシテ形式（「第二な

かどめ)が表す意味関係について次のように述べ、副次的な動作を表すシテ形式と主要な動作を表す定形動詞のあいだに従属的な関係がみられるとしたうえで、「動作の複合性」をシテ形式における意味的な関係の基本的な特徴とする。

すでにのべてあるように、第二なかどめは、ふたつの動詞によってさしだされる動作・状態の、従属的な関係を表現している。述語の位置にあらわれてくる定形動詞が主要な動作をさしだしているのにたいして、第二なかどめの動詞は副次的な動作をさしだしていて、それらのあいだには従属的な関係がみられるのである。従属的な関係は、第二なかどめを使用するばあいでは、ふたつの動作がひとつにまとまって、ひとつの複合動作をかたちづくっているということで、「しながら」などで表現される、ほかの従属の関係とはことなっている。この複合性こそ、第二なかどめによって成立する、意味的な関係の、もっとも基本的な特徴である。(奥田1989: 15)

重要であるのは、次に引用するように、この「動作の複合性」という概念が継起や同時といった時間関係の異なりを包含した意味特徴であることである。

定形動作によってさしだされる、主要な動作は、第二なかどめによってさしだされる、副次的な動作をその成立のための必要条件としてもとめているのであって、副次的な動作が、あるばあいには先行していなければ、あるばあいには同伴していなければ、主要な動作は成立しない。したがって、この複合的な動作は、時間的な関係のあり方という観点からみれば、先行・後続の関係のなかにある、ふたつの動作の複合でもあるし、同時に進行する、ふたつの動作の複合でもある。(奥田1989: 16)

継起性、同時性という時間的な関係は、ふたつの動作が相互作用しているところにはかならずつきまとっている属性であるが、ふたつの動作のあいだの相互作用の具体的な内容をとらえているわけではない。動詞によってさしだされる、ふたつの動作のあいだには、第二なかどめでむすばれているばあい、現実のふたつの動作を反映してはおらず、時間的な関係がみとめられないばあいさえある。このようなばあい、時間的な関係としてはとらえようがない。したがって、第二なかどめが表現している意味的な関係を、たんに継起と共起との時間的な関係のなかにとらえるだけでなく、ふたつの動作・状態のあいだの時間的な関係をもふくみこんでいる、構造的なむすびつきとしてとらえなおしてみる必要がおこってくるのである。(奥田1989: 19-20)

このような立場によることで初めて、例(5)(5')のようなペアが時間関係で異なることをふまえたうえで、二つの動作の意味関係を考察することが可能であろう。

また、主体動作客体変化動詞における意味関係に注目することは、奥田(1989)による用例の分析に示唆されている。奥田(1989)は「ふたつの動作が第二なかどめでむすばれて、ひとつの複合動作をかたちづくっているとき、おおくのばあい、ふたつの動作のあいだに先行・後続の時間的な関係がみられる(奥田1989:20)」と述べるが、そこで典型例として最初に挙げられている例のシテ形式はすべて主体動作客体変化動詞である(奥田1989:20-21の11例)。

「動作の複合」という意味特徴は、奥田(1989)以降必ずしも十分に具体化されているわけではなく、主体動作客体変化動詞に限られたものでもない。しかし、「動作の複合」という時間関係を包含した概念のもと、主体動作客体変化動詞の場合を出発点にして事実を整理することは、奥田(1989)をふまえた意味記述のアプローチとして無理のないものなのではないかと思われる。また、本稿がまず分析するのは二つの事象の時間関係が継起的な場合ではなく、定形動詞が継続相であって同時的な場合であるが、同じ動詞の組み合わせで時間関係の異なりを確認することで、奥田(1989)の記述を具体化して示すことができると考える。

一方、従来の研究には、仁田(1995)に代表されるように、シテ形式の意味記述において「付帯状態(付帯状況、付帯)」と「継起<sup>8)</sup>」という分類法を採るものも多い。このような立場からの記述に対して、本稿は次のような二点を考慮した記述を目指す。

#### ①シテ形式の動詞のタイプを考慮した記述

仁田(1995)は「付帯状態」に「し手容態」「し手動作」「心理状態」といった下位分類を設定し、主体変化動詞や主体動作動詞といったシテ形式の動詞のタイプに沿った記述を行なっている<sup>9)</sup>。一方、主体動作客体変化動詞については、言及がないわけではないものの周縁的な扱いに留まる(仁田1995<sup>10)</sup>、また吉永2008<sup>11)</sup>)。主体動作客体変化動詞も動詞のタイプに対応して何らかの意味を表すのか、他のタイプによる意味関係とどう関連するのかといった体系的な考察が必要であるように思われる。料理マニュアルにおける用例を分析した坂井(2000)は主体動作客体変化動詞を多く取り上げ、多様な意味関係を記述する。しかし動詞のタイプが明示されているわけではなく、また意味関係を文法的特徴から法則的に説明しているとは言いがたい。その意味記述(坂井2000:79,81)を参考としつつも、本稿では客体の同一性や語順などの構文的特徴からのタイプ化を試みる。

#### ②「付帯状態」か「継起」かという二分法を用いない記述

本稿の分析では、時間関係の異なりを認めつつ動詞のタイプに対応する意味関係の共通性に

注目するため、従来の「付帯状態」と「継起」いう二分法を用いない。これらのカテゴリーは同時か継起かという時間関係において鋭く対立するものである。特に「継起」の側が時間関係を本質的な特徴とすることは、主体が異なる場合やいわゆる「原因」の場合（仁田1995の「起因的継起」）をも包括することから明らかである。もし時間関係（およびそれに応じた意味の定義）に従うなら、定形動詞のアスペクトが異なる冒頭の例は（a）が「付帯状態」、（b）が「継起」に分類されるはずである<sup>12)</sup>。

(a) 太郎は新聞をひろげて、ゆっくり読んでいた。

(b) 太郎は新聞をひろげて、ゆっくり読んだ。

そうした場合、当然、両者を共通の意味関係の枠の中でとらえることはできない。確かに、主体動作客体変化動詞の用例は一見すると「継起」にあてはまりそうなものが多い。しかし、(a)のように定形動詞が継続相の場合は明らかに「継起」ではなく、また例外として軽視できるものでもない。つまり、定形動詞のアスペクトを考慮せず動詞のタイプだけで一方的に時間関係を決めることはできない。そしてより重要なことに、(b)のように定形動詞が完成相の場合に認められるのは単純な継起性ではなく、〈客体の結果状態の同時性〉を下敷きにしたものであり、これは時間関係のあり方に関わらず動詞のタイプに共通している。このことは「付帯状態」と「継起」と二分する枠組みを採用した場合には記述しにくいように思われる。

### 2.3. 分析の対象と用例収集の範囲

分析の対象は、現代日本語で書かれた小説作品の地の文と会話文の実例である。中止形がシテ形式であり、定形動詞が終止の位置にあるシテイル（シテイタ）であるという形式的特徴をもつものを対象とする。これは、先に触れたように、定形動詞が完成相であって二つの事象が継起的な関係である場合をいったん考慮の外におくことで、「継起」という時間関係を前面に置いた分類ではとらえられない意味の側面に注目するためである。

第一中止形（シ形式）、有標の第二中止形の形式（サセテ、サレテなど）は対象外である。また、アスペクト的な意味が典型的に実現し、二つの事象がなるべく単純な関係にある例から分析するため、後続する動詞が連体形や連用的従属形式である場合や、定形動詞が否定・受動・使役などの有標の形式、ノダ以外のモダリティ形式である場合は対象外である。

用例は以下の範囲から手拾いで収集した。①の範囲を広げるかたちで同じ作品から②の範囲で用例を収集したものもある。

- ① 文庫本（短編集含む）収録の各作品の地の文について、冒頭からすべての形式の中止形を150例ずつ収集したもののうち、上記の特徴をもつ例（150例×32冊＝4800例中、150例程度）、および同じ範囲の会話文の例（若干数）
- ② 各作品全体から収集した、上記の特徴をもつ例（20冊700例程度）

この中から、個別具体的な事象を表している文で、定形動詞が動作継続・結果継続を表す場合を第一次的な分析の対象とする。恒常的な特性・ものの配置・反復習慣を表す場合は扱わない。なお、定形動詞は動作継続の例がほとんどで、結果継続は少数であった。主体の同一性と主体のタイプについては、主体が同一で、意志的な「ひと」である場合に限定し、主体が異なる場合および主体が「もの」の場合は対象外とする。

### 3. 用例の分析—シテ形式が表す副次的な意味

用例の分析にあたって、次のことを再度確認しておく。シテ形式が主体の動作と客体の変化の二側面を表す主体動作客体変化動詞であっても、定形動詞が継続相であれば基本的に〈客体の変化結果としての状態〉を表す。「太郎は新聞を積み重ねて、読んでいた」が表すのは客体の変化結果としての状態と主たる動作との同時的關係であって、「太郎は新聞を積み重ねながら、読んでいた」のような主体の二つの動作の同時的進行の關係ではない<sup>13)</sup>。このことから、定形動詞が継続相である場合にシテ形式が表す副次的な意味を〈客体の結果状態〉と名づけておく。

以下、次のような順序で記述をすすめる。まず、3.1節において定形動詞が継続相である場合を分析する。意味関係をみると、シテ形式が表す〈客体の結果状態〉が、主たる事象に対して意図的に準備されたものとして効いている場合がほとんどである。そのような意味関係を基本として、3.1.1節と3.1.2節では、客体が同一かそうでないかという文法的特徴＝〈客体の同一性〉から、副次的な意味をそれぞれ〈共通の客体の結果状態〉〈補助的な客体の結果状態〉という二つのバリエーションに整理して記述する。また3.1.2節では例外的に見える場合についても触れる。そのうえで3.2節において、同じ用例について定形動詞を完成相にしてみることで、時間関係の異なりと意味面の共通性を確認する。

#### 3.1. 定形動詞が継続相の場合

- 3.1.1. 客体が同一の場合
  - 3.1.2. 客体が同一でない場合
- } 〈意図的に準備された客体の結果状態〉

#### 3.2. 定形動詞が完成相の場合

3.2.1. 客体が同一の場合

3.2.2. 客体が同一でない場合

### 3.1. 定形動詞が継続相の場合

#### 3.1.1. 客体が同一の場合：〈共通の客体の状態〉

この場合、シテ形式と定形動詞の両方が他動詞であり、かつシテ形式の表す動作の客体は主たる動作の客体でもある<sup>14)</sup>。そのように構造が限定されているため、客体が同一でない場合に比べると用例数は相対的に少ない。しかし客体が同一であれば、客体の結果状態が主たる動作のために用意されたものであることが一文レベルで非常にはっきりしている。一方、客体が同一でない場合には、シテ形式が表す客体の結果状態が、相対的に間接的に主たる事象に関わっている場合（例（27）（28））や、文脈を考慮してはじめて意味関係のあり方が読み取れる場合（例（31）（32））も含まれている。このことから客体が同一である場合を先に扱うことにする。

シテ形式は二つの動作に共通の客体における結果状態を表している。これを副次的な意味として〈共通の客体の結果状態〉としておく。まず提示するのは、シテ形式が「丸める、重ねる」のような〈もようがえ動詞〉の場合である。シテ形式は、主要な動作のための前提として必要になる、客体の形状における変化結果としての状態を表している。たとえば例（7）では、「紐で束ねる」という主要な動作のために、「新聞」という客体の形状を「積み重ねた状態」にしている、という意味関係になっている。

(7) 菊子が新聞を積み重ねて、紐で束ねていた。(山の音029)

(8) 「お前の上着をか」

「うん。まるめて枕の替りに頭の下に敷いてる。」(夏草下010)

(9) 兵隊はトタン板の四つの角をぐるぐるに折り曲げて持っている。(黒い雨028)

次に提示する「のせる、入れる」のような〈とりつけ動詞〉〈うつしかえ動詞〉の例では、シテ形式が二格（へ格）名詞によって表される第二の対象をともなっていることが普通である<sup>15)</sup>。この場合、定形動詞が表す主要な動作（客体への働きかけ）に対して、副次的な意味として〈客体の位置〉をも表している。シテ形式に関係する二格（へ格）名詞との関係に従って、語順の違いによる二つのバリエーションを示す。

(a) [語順：二格名詞→ヲ格名詞→シテ形式→定形動詞]

(10) 膝の上に五日分ほどの新聞を積み重ねて、ゆっくり読んでいた。(山の音163)

(11) 住職は縁側に蔵書を持ち出して陽に当てていた。(夏草下009)

(12) 人夫は一升瓶二本に水を詰めて車に積んでいた。(黒い雨029)

(b) [語順：ヲ格名詞→二格名詞→シテ形式→定形動詞]

(13) 保子は茶の間に、十日分ほどの新聞を膝に積み重ねて読んでいた。(山の音032)

(14) 女たちはそれぞれガートの露店で買った花びらを木の葉にのせて水に流している。(深い河210)

(15) 耕作は、福子からもらった白い小石を、袋にいれて腰につけている。(泥流地163)

(b) では、シテ形式のみに関係する二格名詞が両方の動詞に関係するヲ格名詞よりも定形動詞に近い位置にある。例(14)(15)では規定語とヲ格名詞の部分(「それぞれガートの露店で買った花びらを」「福子からもらった白い小石を」)が長いためにこのような語順になっているとも考えられる。主体動作客体変化動詞の場合に、客体が同一であることと関係してこのような語順のバリエーションがあることはこれまで指摘されていないため、整理して示しておく。

### 3.1.2. 客体が同一でない場合：〈補助的な客体の結果状態〉

このタイプは客体が同一ではないが、多くの場合、シテ形式が表すある客体の結果状態が主たる事象のための下地として意図的に準備されたものであることが明らかである。この意味で、主たる事象に対して補助的に働いていると言える。以下、シテ形式が表す副次的な意味を〈補助的な客体の結果状態〉として、用例を確認する。主たる事象との関係が一様であるわけではないため、以下、関わり方が相対的に直接的な場合から間接的な場合へと整理して提示する。また、一文ではシテ形式の表す客体の結果状態が主たる事象にどう効いているのかわかりにくい場合についても触れる。

まず、定形動詞が他動詞である場合の用例を示す。例(16)～(20)では、主たる動作の実現にあたって必要な客体の結果状態をヲ格名詞とシテ形式が表している。変化をこうむる客体は、主たる動作を効果的に行なうために、それに何らかのかたちで加わっている。例(16)(19)で形状の変化、例(17)(18)(20)で位置の変化をこうむる客体は、主たる動作のために用いられるという点では、広い意味の「道具」と言えるかもしれない。

しかし正確には、例(16)の「原稿紙」は主たる動作を行なうために必要な第二の対象を表している。このことは「原稿紙」が定形動詞に対して「原稿紙に随筆を書く」という関係になることからわかる。例(17)(18)では、「蓄音機で室内楽を聴く」「盥で濯ぎものをする」という関係にあることからわかるように、「蓄音機」「盥」は主たる動作にとって直接の道具

として働くものであり、シテ形式は主たる動作を効果的に行なうための客体の結果状態を表している。例(19)(20)の「蕙」「椅子」は、動作の直接の道具(たとえば庖丁や鉛筆)ではなく、主たる動作を効果的に行なうために必要な、いわば間接的な道具としての客体である。

[主たる動作を行なうために必要な第二の対象の結果状態]

(16) 寝ながら藁半紙のような原稿紙を拡げて、富岡は、漆に就いての随筆を書いていた。

(浮雲048)

(→ 原稿紙に随筆を書くために、原稿紙を拡げた状態にする)

[主たる動作を効果的に行なうために必要な道具の結果状態]

(17) 清吾は、枕許に手巻きの蓄音機を引き寄せて、横になったまま音のかすれた室内楽を聴いていた。(白夜を177)

(→ 蓄音機で室内楽を聴くために、蓄音機を引き寄せた状態にする)

(18) 井戸端に盥を出して作造が濯ぎものをしていた。(あ・う032)

(→ 盥で濯ぎものをするために、盥を井戸端に出した状態にする)

[主たる動作を効果的に行なうために必要な間接的な道具の結果状態]

(19) 下のおばさんが蕙をひろげて大根をサクサクと切っていた。(リツ子028)

(→ 蕙の上で大根を切るために、蕙をひろげた状態にする)

(20) その午後、田中は窓の近くに椅子を運んで、鉛筆を片手に仏語で手紙を書いていた。

(留学017)

(→ 椅子に座って手紙を書くために、椅子を窓の近くに運んだ状態にする)

次の例(21)～(24)でも、客体の結果状態が同時に存在していることによって、主たる動作を直接的に、あるいは効果的に行なうことが可能になっている。例(21)(22)では、主たる動作は、シテ形式が表す客体の結果状態がなければ普通は実行できないものである(貯金箱をあけなければ金は数えられない、紙袋の口を広げなければなかは見せられない)。一方、例(23)(24)では、必ずしも客体の結果状態がなければ主たる動作が実行できないわけではないが、主たる動作を効果的に行なうために必要になるものである。

これらの例では、二つの客体を表す名詞(「竹筒の貯金箱」と「金」、「紙袋の口」と「なか」、「ゲートル」と「足」、「瓶」と「酒」)は同一の物体における部分どうし、あるいは入れ物と中身の関係にあるというタイプ化が可能であり、二つの客体がまったく別のものである例(16)

～(20)のような場合とは関係が異なる。

[主たる動作を行なうために必要な結果状態]

(21) 昨夜拓一が、竹筒の貯金箱をあけて、金を数えていた。(泥流地181)

(→ 貯金箱の中の金を数えるために、貯金箱をあけた状態にする)

(22) 玄関先に出てきたマリのまえで、行天が紙袋の口をちょっと広げてなかを見せていた。(まほろ168)

(→ 紙袋のなかを見せるために、紙袋の口を広げた状態にする)

[主たる動作を効果的に行なうために必要な結果状態]

(23) 浜野軍曹はゲートルを解いて、足を揉んでいました。(ねじま126)

(→ 足を揉むために、ゲートルを解いた状態にする)

(24) その一つの卓に瓶を置いて、准士官が一人酒を飲んでいた。(桜島078)

(→ 酒を飲むために、瓶を卓に置いた状態にする)

定形動詞が自動詞の場合も確認しておく。この場合は、客体(ヲ格名詞)が共通であることはありえない。しかし次の例(25)(26)のように、シテ形式が主たる事象のために必要な客体の結果状態を表している点は、定形動詞が他動詞である場合と同様である。

[主たる動作を行なうために間接的に働く結果状態]

(25) 「(前略)あの時浜で、太郎が、お父様から寝せつけていただいた所があったでしょう。あの辺りの砂を探し出して、その上に寝てましたのよ。(後略)」(リツ子014)

(→ 砂の上に寝るために、砂を探し出した状態にする)

(26) 月の明るい海だった。リツ子の枕頭のガラス戸を押し開いてなまめき照っている海の窓に凭れていた。(リツ子027)

(→ 窓に凭れるために、ガラス戸を押し開いた状態にする)

ここまでの例と違って、次の例(27)(28)では、シテ形式の表す動作の客体が主たる動作に直接的に関わっているとは言いにくい。主たる動作に直接的に関わっていると言えるのはそれぞれ「ヘッド・ランプ」を部分とした「バイク」、「コンパクト」の部分の「鏡」であろう。この意味で例(16)～(20)のような場合に比べると間接的であるが、客体の結果状態が主たる事象に対して補助的に働いていることは同様である。

[主たる事象のための道具の部分または道具的部分を含むもの全体への働きかけ]

- (27) タケはヘッド・ランプを消して、飯塚と冴子の乗ったタクシーを尾行していた。  
 (眠り猫181)  
 (→ バイクでタクシーを尾行するために、バイクのヘッド・ランプを消した状態にする)
- (28) あきらめきった表情で、毛布の皺の中に、コンパクトを挟みこんで、ゆき子は乱れた髪をなおしていた。(浮雲059)  
 (→ コンパクトの鏡で髪をなおすために、コンパクトを皺の中に挟みこんだ状態にする)

次の例(29)(30)でシテ形式が表しているのは、主たる動作の成立に食いこんでいく対象としての「もの」における結果状態ではない。主たる事象をとりまく空間、あるいは環境としての客体における変化結果としての状態である。ただし、このような例は少ない。

[主たる動作を効果的に行なうために必要な環境としての結果状態]

- (29) 部屋に戻ると、君島が勝手にクーラーを入れて、コーヒーを飲みながらゴルフ中継を見ていた。(顔に降157)  
 (→ 部屋でゴルフ中継を見るために、部屋のクーラーを入れた状態にする)
- (30) 次の部屋に弱い電燈をつけて、息子が眠っていた。(仁田1995の例(38)<sup>16)</sup>  
 (→ 部屋で眠るために、部屋に弱い電燈をつけた状態にする)

〈客体の同一性〉によって取り出した二つのタイプの文法的な異なりは、次のような言い換えの可否に現れる。客体が同一の場合には、次の例(10")(13")のように、シテ形式を連体形にしてヲ格名詞の前におくことが可能で、意味もほとんど変わらない。このような言い換えは、例(17")(21")のように、客体が同一でない場合には不可能である。

- (10") 膝の上に積み重ねた五日分ほどの新聞を、ゆっくり読んでいた。
- (13") 保子は茶の間で、膝に積み重ねた十日分ほどの新聞を読んでいた。
- (17") \*清吾は、枕許に引き寄せた手巻きの蓄音機を、横になったまま音のかすれた室内楽を聴いていた。
- (21") \*昨夜拓一が、あけた竹筒の貯金箱を、金を数えていた。

ここまで、シテ形式が基本的に〈意図的に準備された客体の結果状態〉を表すものとして用例を確認してきた。これに対して、実例としては少数であるが、一文を見る限りではシテ形式と主たる事象との関係が明確でない場合がある。しかしそのような場合でも、文脈を広く考慮することで、客体の結果状態が意図的に準備されたものであり、主たる事象の成立の際に同時に存在する理由が理解できる。ここでは文脈も挙げながら、そのような意味のあり方についても確認する。

例(31)(32)はそれぞれ、定形動詞が他動詞と自動詞である。いずれも、一文ではシテ形式が表す客体の結果状態が主たる事象のために準備されたものとは判断しにくい。

(31) 見ろ、おまえの白け果てた骨の上に、こうして父と子が「味噌の骨」をのせて握り飯を喰べている。(リツ子056)

(32) 母が、太郎にも服を着せて、ラジオの前に坐っている。(リツ子019)

しかし文脈をみると、例(31)では骨壺をリツ子に見立て、そこにリツ子を思い出させる「味噌の骨」をおくことで、家族が一緒になって食事をしている(と「私」がみなしている)ことがわかる。二種類の「骨」の連想関係が存在しているが、重要であるのは、主たる事象に対してシテ形式がやはり補助的な客体の結果状態を表している点である。シテ形式が表す副次的な動作の客体が主たる事象の成立に加わっていくという意味では、これまでに挙げた例と同様である。

(31) 「太郎。母のポンポンの上で御飯を喰べようか」

「うん、うん」と太郎は嬉しそうに肯いて、「ハハもおにぎり喰べたい、喰べたいって?」

今度は私が笑って肯いてみせるのである。そこで骨壺の上に握り飯の竹の皮をのせた。発ち際に下のオバさんが作ってくれたおにぎりには、きっちりと沢庵が添えてある。その横に小さな茄子の味噌漬が光っていた。

「ほうら、太郎。味噌の骨」

私はそれを指でつまんで、いぶかる太郎の口に入れてやる。

「すっばい、すっばい」と太郎が眉根を寄せている。

「味噌の骨」には死者の思い出があった。食慾の無い日にはきまってリツ子が「ほらあの骨を」と狡そうに私に甘えて、下のおばさんから味噌漬をねだらせたものである。結核が腸に来たと自分でも知ってからは、いつとはなしにその「味噌の骨」を云わな

くなった。言葉の「骨」を忌んだのであろう――。

何もかも済んで終わった。見ろ、おまえの白け果てた骨の上に、こうして父と子が「味噌の骨」をのせて握り飯を喰べている。(リツ子056)

例(32)は「家族そろって玉音放送を聞く」という文脈の中で、ラジオの前で放送を待つにあたって家族(太郎)の服装をきちんと整えておくことが、主たる事象に対して必要な客体の結果状態として効いていることがわかる。

- (32) 茶の間の方に帰ってみた。母が、太郎にも服を着せて、ラジオの前に坐っている。抱いたまま、私を見上げ、
- 「リツ子さんは？」
- 「聞かないそうです」
- 「でも、何か覚悟しなければならないことなら、一緒に聞いた方がよくはない？」
- 「いいでしょう」
- 「あなたは、裸？」「いいさ裸でも。生れた時の恰好だから」
- 「上着だけでもおかけなさい。新のがあるのよ」
- と母は太郎を横にはずして、箆笥の一番下の引出しから、弟の霜降りの学生服をとりだした。
- 「じゃ、着よう」(リツ子019)

もし、シテ形式が主体動作客体変化動詞である場合の意味関係が、例(31)(32)のようなものだけであれば、客体の結果状態は主たる事象の成立のために必要なものとして食いこんではいけない、単なる付随的なものとしてのみ扱われてもおかしくない<sup>17)</sup>。しかし3.1.1節と本節前半で確認したように、実例の多くでは一文レベルで客体の結果状態が主たる事象のために準備されていることが明確であり、二つの事象に明らかな統一性がみられる。中でも3.1.1節で分析した二つの動作の客体が同一の場合は、意味面のみならず文法的特徴から明確なパターンとして取り出すことができる。それを足がかりに、客体が同一でない場合の、より精密なパターン化が可能になるように思われる。

### 3.2. 定形動詞が完成相の場合

シテ形式が主体動作客体変化動詞である場合、基本的に定形動詞のアスペクトによって時間関係の違いが表し分けられることは2.1節で述べた。本節では、3.1節で取り出したタイプに

沿って定形動詞を完成相に言い換えることで、客体の変化結果を基本としたシテ形式の副次的な意味が、時間関係の違いに関わらず保持されているという事実を確認する。なお、言い換えは場面・文脈を考慮せず一文レベルで考察する。

### 3.2.1. 客体が同一の場合：〈共通の客体に対する先行動作とその結果状態〉

まず、客体が同一である場合には、定形動詞を完成相にすると、シテ形式が〈共通の客体に対する先行動作とその結果状態〉を表す。定形動詞が継続相の場合と違って、シテ形式が表す主体の動作の側面が前面化し、二つの動作の連続がとらえられることになる。順序は非常に明確である。

- (7) 菊子が新聞を積み重ねて、紐で束ねた。
- (8) (上着を) まるめて枕の替りに頭の下に敷く。
- (9) 兵隊はトタン板の四つの角をぐるぐるに折り曲げて持つ。
- (10') 膝の上に五日分ほどの新聞を積み重ねて、ゆっくり読んだ。
- (11') 住職は縁側に蔵書を持ち出して陽に当てた。
- (12') 人夫は一升瓶二本に水を詰めて車に積んだ。

定形動詞のアスペクトによる時間関係の異なりは、次のように連体形での言い換えにも出てくる。3.1.2節で確認したように、定形動詞が継続相で二つの事象が同時的な場合は、次の例(10'')のようにシテ形式を連体形にして客体を表すヲ格名詞の前においてもよく、意味がほとんど変わらなかった。一方、定形動詞が完成相で継起的な場合は、例(10''')のように連体形を使って言い換えると先行する動作との継起性がとらえられなくなり、(非文法的ではないが)意味が変わってしまう。

- (10) 膝の上に五日分ほどの新聞を積み重ねて、ゆっくり読んでいた。
- (10'') 膝の上に積み重ねた五日分ほどの新聞を、ゆっくり読んでいた。
- (10') 膝の上に五日分ほどの新聞を積み重ねて、ゆっくり読んだ。
- (10''') 膝の上に積み重ねた五日分ほどの新聞を、ゆっくり読んだ。

一方で、定形動詞が完成相であっても、客体の変化結果としての状態が主たる事象の成立の際に同時に存在していることは継続相の場合と同様である。「新聞を積み重ねて、読んでいた」でも、「新聞を積み重ねて、読んだ」でも、「積み重なった状態」にある新聞を読むことい

うことには変わりがない。つまり、定形動詞が完成相の場合、主体の動作は定形動詞の表す動作に先行し、かつ、客体の結果状態は定形動詞の表す動作と同時的な関係にある、という複合的な時間構造になっている。

- (11) 住職は縁側に蔵書を持ち出して陽に当てていた。 〈客体の結果状態の同時性〉  
 (11') 住職は縁側に蔵書を持ち出して陽に当てた。 〈主体の動作の先行性 = 客体の結果状態の同時性〉

例(13')～(15')の、二格名詞とシテ形式が定形動詞に近い位置にある語順の場合でも、二つの動作の継起性(シテ形式が表す動作の先行性)だけでなく、シテ形式が表す客体の結果状態の同時性とともな〈客体の位置〉の表現が確認できる。

- (13') 保子は茶の間で、十日分ほどの新聞を膝に積み重ねて読んだ。  
 (14') 女たちはそれぞれガートの露店で買った花びらを木の葉にのせて水に流す。  
 (15') 耕作は、福子からもらった白い小石を、袋にいれて腰につける。

### 3.2.2. 客体が同一でない場合：〈補助的な客体に対する先行動作とその結果状態〉

次に、客体が同一でない場合には、〈補助的な客体に対する先行動作とその結果状態〉を表すようになる。客体が同一である場合と同様、シテ形式は先行する一つの独立した動作を表す。しかし、客体の結果状態は続く動作の実現のために用意されるものであり、二つの動作の順序ははっきりしている。

〈定形動詞が他動詞の場合〉

- (16') 寝ながら藁半紙のような原稿紙を払げて、富岡は、漆に就いての随筆を書いた。  
 (17') 清吾は、枕許に手巻きの蓄音機を引き寄せて、横になったまま音のかすれた室内楽を聴いた。  
 (18') 井戸端に盥を出して作造が濯ぎものをした。  
 (19') 下のおばさんが蕤をひろげて大根をサクサクサクと切った。  
 (20') その午後、田中は窓の近くに椅子を運んで、鉛筆を片手に仏語で手紙を書いた。  
 (21') 昨夜拓一が、竹筒の貯金箱をあけて、金を数えた。  
 (22') 玄関先に出てきたマリのまえて、行天が紙袋の口をちょっと広げてなかを見せた。  
 (23') 浜野軍曹はゲートルを解いて、足を揉みました。

(24) その一つの卓に瓶を置いて、准士官が一人酒を飲んだ。

〈定形動詞が自動詞の場合〉

(25) 「あの辺りの砂を探し出して、その上に寝ましたのよ。」

(26) リツ子の枕頭のガラス戸を押し開いてなまめき照っている海の窓に凭れた。

しかしこれらの場合でも、二つの事象の間に〈主体の動作の先行性〉とともに、〈客体の結果状態の同時性〉が認められることを再度確認しておく。同時に存在する客体の結果状態は、主たる事象に対して何らかの意味で必要なものとして効いているのだが、定形動詞が継続相か完成相かに関わらず、シテ形式の主体動作客体変化動詞という動詞のタイプと対応して意味関係の中心となっているのである。

#### 4. まとめと今後の課題

##### 4.1. 本稿のまとめ

本稿は定形動詞のアスペクトとシテ形式の動詞のタイプに注目しながら、シテ形式が主体動作客体変化動詞である場合に表される副次的な意味について主に次の二点を記述した。

- ① シテ形式が主体動作客体変化動詞の場合、定形動詞のアスペクトによって、意味のあり方は次のように明確に異なる。
  - (A) 定形動詞が継続相の場合、シテ形式は主体の動作の先行性の側面は背景化させて、主要な事象に対して〈客体の結果状態の同時性〉を表す(3.1節)。
  - (B) 定形動詞が完成相の場合、主要な動作に対して〈主体の動作の先行性〉と〈客体の結果状態の同時性〉の両面を表す。(3.2節)。
- ② シテ形式が主体動作客体変化動詞の場合、主たる事象のための〈意図的に準備された客体の結果状態〉を表す。またシテ形式が主体動作客体変化動詞であることによって、二つの動作の客体が同一である場合(3.1.1節、3.2.1節)と、同一でない場合(3.1.2節、3.2.2節)というバリエーションがある。これらは、定形動詞のアスペクトによる二つの事象の時間関係の違いに関わらず、動詞のタイプに対応した意味特徴である。

本稿の分析を整理して典型例とともに示すと、以下のようになる。

## A. 定形動詞＝〈継続相〉

シテ形式＝〈客体の結果状態の同時性〉

## A-1. 客体が同一：共通の客体の結果状態

- ・太郎は畳の上に新聞をひろげて、読んでいた。

## A-2. 客体が同一でない：補助的な客体の結果状態

- ・太郎は畳の上に新聞をひろげて、爪を切っていた。

## B. 定形動詞＝〈完成相〉

シテ形式＝〈主体の動作の先行性＋客体の結果状態の同時性〉

## B-1. 客体が同一：共通の客体に対する先行動作とその結果状態

- ・太郎は畳の上に新聞をひろげて、読んだ。

## B-2. 客体が同一でない：補助的な客体に対する先行動作とその結果状態

- ・太郎は畳の上に新聞をひろげて、爪を切った。

本稿は、奥田（1989）の「動作の複合」という時間的側面を含みこんだかたちでの意味のとらえ方をふまえて、シテ形式が表す副次的な事象の意味を記述した。奥田（1989）は、「動作の複合」のうち継起的な時間関係がみられる場合について次のように述べている。

ふたつの動作が第二なかどめでむすばれて、ひとつの複合動作をかたちづくっているとき、おおくのばあい、ふたつの動作のあいだに先行・後続の時間的な関係がみられる。定形動詞によってさしだされる、主要な動作が実現するにあたって、まえもって用意しておかなければならない状態が、第二なかどめの形のなかにさしだされる動作によって実現されるのである。したがって、第二なかどめの形のなかにさしだされる動作は、定形動詞によってさしだされる動作との関係において、かならず先行していなければならない。そして、この動作は完結して、結果的な状態をのこして、それが主要な動作の実現のための条件としてはたらいっている。ここでは、第二なかどめの動詞はパーフェクト性をおびているのである。この意味で、第二なかどめの形のなかにさしだされる動作は、主要な動作に先行する、副次的な動作としてあらわれながら、ふたつの動作のひとまとまり性が生じてくる。つまり、第二なかどめの動詞がふくみとしてさしだす「状態」のなかでのみ、定形動詞によってさしだされる動作は進行することができる。（奥田1989：20）

このような指摘は、従来単に「継起的」であるとされてきた例について、〈主体の動作の先行

性〉と〈客体の結果状態の同時性〉の両面を認める本稿の立場と一致している。定形動詞が継続相であって〈客体の結果状態の同時性〉をシテ形式が表している場合、先行する動作そのものは背景化されているが、「この動作は完結して、結果的な状態をのこしていて、それが主要な動作の実現のための条件としてはたらいっている」という点は同じである。

以下、シテ形式の分析において重要であると思われる二つの点を確認しておく。

第一に、意味関係のあり方が定形動詞のアスペクトによって異なってくることから、シテ形式の意味分類・記述では、これを文法的な条件として考慮することが必要である。少なくとも主体動作客体変化動詞の場合には、定形動詞のアスペクトによって二つの事象の時間構造の異なりを説明できた。

第二に、シテ形式が表す事象が結果状態か動作か（主たる事象に対して同時的か継起的か）という違いに関わらず、定形動詞が表す主たる事象との関係において、シテ形式はどちらも副次的な事象を表す。そのような把握によって、主体動作客体変化動詞の場合、定形動詞のアスペクトによって時間構造が異なる一方で、主たる事象のために準備される客体の結果状態をシテ形式が共通して表すことが記述できた。客体における変化結果としての状態を表すことは主体動作客体変化動詞というタイプに対応しているが、それが続く事象に対してどのような意味をもつのかは、定形動詞の表す事象との関係の中でしか見えてこない。定形動詞のアスペクトへの注目（第一の点）も、このことと関わる。定形動詞が完成相である場合の二つの動作の継起性には、主たる動作のために客体の結果状態を先行させて成立させるという意図が含まれているのであって、単に事象の順序が継起的であるというわけではない。

すでに述べたように、本稿は、「付帯状態」と「継起」をまず大きく二分しその特性の違いを強調して記述しようとする立場とは異なる。しかし上記の点は、用法の分類や序列づけに先立って、シテ形式の用いられる文の特徴として確認しておかなければならない事実ではないかと思われる。

#### 4.2. 今後の課題

本稿では、先にまとめたように、シテ形式の分析では従来注目されることの少なかった定形動詞のアスペクトによって時間関係が文法的に表し分けられることを明示し、客体の結果状態に基づく副次的な意味を整理して記述することができた。しかし、本稿では記述しきれなかった点も多い。以下、今後の主な課題を三点述べる。

第一に、奥田（1989）の「動作の複合」という概念には精密化が必要である。「動作の複合」は、動詞のタイプが主体動作客体変化動詞である場合だけでなく、主体変化動詞の場合も含む。また、奥田（1989）は「動作の複合」と同時に、シテ形式の修飾語（副詞）化および複文の単

文化の問題を「ふたまた述語文」という文構造を挙げて論じている。他のタイプの動詞を考慮しつつ、主体動作客体変化動詞でもこれらの点を検討する必要がある。

第二に、本稿の段階では、主体動作客体変化動詞による意味関係のバリエーションについて文法的観点から十分に体系的に記述することができていない。特に、客体が同一でない場合について、文全体の構造に関わる名詞どうしの関係からパターンを整理する余地がある。またその他のタイプの動詞の場合も視野に入ってくる<sup>18)</sup>。これらの点の記述は、頻度の高い、定形動詞が完成相である場合を精密に分析することで可能になると考える。

第三に、主体変化動詞の場合。「行く、座る」などの「ひと」の意志的变化を表す主体変化動詞は、変化結果を残すという点で主体動作客体変化動詞と共通し、同様に分析できる場合がある。しかし実態は相対的に複雑であり、「太郎は道端にしゃがんで、銀杏を拾っていた」のように意図的に準備された主体の結果状態を表す場合のみならず、「太郎はさびしそうに背中をまるめて、銀杏を拾っていた」のように単に主たる動作に付随する結果状態としか言えない場合もある。主体動作客体変化動詞の場合をふまえて分析する必要がある。

このほか、中止形と定形動詞のアスペクトの相関から時間関係を記述するにあたり、中止形のアスペクト(シテイテ形式)、第一中止形(シ形式)との関係など、すべて今後の課題である。

#### 注

- 1) <定形動詞>という用語を、奥田(1984、1989)に従って、テンス・ムードの形態論的カテゴリーの体系を有し、典型的には文末の位置にあって文を言い切るという構文論的機能をもつ動詞の形式として定義する。シテ形式は非定形動詞として文法的な意味(テンス・ムード)の表現を定形動詞にゆだねる。なお、シテ形式の非定形(節)性については、益岡(2014)が言語類型論的研究および南(1974、1993)の従属節分類との関連から言及している(益岡2014: 535-539)。
- 2) 主体動作客体変化動詞や主体変化動詞といった動詞のタイプおよびその下位分類については、言語学研究会編(1983)、工藤(1995)の枠組みに従う。アスペクトについては、とくに完成相と継続相の対立がテキストにおいて他の事象との時間関係(タクシス)を構成するという観点から、工藤(1995)に従う。
- 3) 変化結果としての状態と主たる事象は同時的であるが、現実においては「縁側に座る」「窓を開ける」という動作が「空を見る」という動作に先行する(つまり「継起」的である)だろう。しかし、文において定形動詞が表す継続的な動作に付随するかたちで前面化しているのは主体や客体の結果状態の側面であって、現実には先行するかもしれない主体の動作の側面、および二つの動作の「継起」性は背景的である。一方、定形動詞が完成相の場合は、主体の動作の先行性が前面化する点で、継続相の場合と明確に異なる。
- 4) 例(1')は、シテ形式に従属する二格名詞の有無およびそのタイプ、シテ形式の位置やポーズの有無によって同時的にもなりうる(「太郎は空を座って見た」)。一方、例(2')のようにシテ形式が二格名詞なしで身体部分の様態のみを表すものは、定形動詞が完成相であっても基本的に同時的である(南1993: 79の例(29)「手ヲツナイデ歩キマシタ」なども同様)。シテ形式が主体変化動詞の場合、動詞のさらなる下位分類や名詞との関係の詳しい分析が必要である。ここで重要なのは、継起的になりうるのは定形動詞が継続相の例(1)

ではなく完成相の例(1')の方であるという点である。

- 5) 例(1)は姿勢変化動詞の例だが、同じ主体変化動詞でも、位置変化動詞では「太郎は縁側に出て、空を見ていた／見た」のように時間関係の違いが明確であり、実態は複雑である。
- 6) 結果状態の同時的残存と動作の同時的進行を同じ「同時」としてよいかなど、体系的な記述のためには検討すべき点も多い。また次のような場合、定形動詞が継続相でも結果状態や動作との同時的關係とは言えない(しかし、動作の残す効力のなかで主要な動作が進行する点で単なる継起的関係とも言えない)。
  - ・太郎は菓を飲んで、原稿を書いていた。
  - ・太郎は花子の手紙を読んで、いつもより熱心にピアノを練習していた。
- 7) 加藤(2003)は「並列構造」では連用形(シテ形式含む)の動作が後続の動詞の動作よりも先に生じている点から継起的用法を基本におき、様態や付帯状況などの意味は語用論的に解釈されるものとする。また「非並列(修飾)構造」では二つの独立した動作と見なせないため、非継起的になるとする(加藤2003:41-46)。また「動詞の連用形がどのような場合に後続要素の支配を受けるのか」という観点から、後続する動詞のアスペクトの意味が先行する連用形に及ぶかどうかをその他の文法的意味とともに検証している(加藤2003:29-41)が、定形動詞のアスペクトによる時間関係の構成という観点では言及していない。
- 8) ここでの「継起」は仁田(1995)の「時間的継起」と同義とする。
- 9) たとえば「し手容態」については、成田(1983)、および奥田(1989)の「ふるまい状態」という意味関係とそれに対応する動詞のタイプをふまえ「《姿勢変化》《着脱》《携帯》とでも呼べる事象を形成する動詞によって、構成されている」とする(仁田1995:93)。奥田(1989)は「立つ、手をあげる」などの「ふるまい動詞」による「ふるまい状態」と主要な動作の複合を取り上げ、「姿勢」と「服装」という下位分類を認める(奥田1989:26-29)。ただし「ふるまい動詞」が必ず「ふるまい状態」を表すのではなく、局面のとらえ方の違いによって、「ふるまい動作」として二つの動作の継起的な複合を表す場合があることも指摘している。
- 10) 仁田(1995)は「付帯状態」の箇所ですべて主体動作客体変化動詞の場合に言及している。「し手容態」などの明確なタイプのほかに「付帯状況」を立て、「次の部屋に弱い電燈をつけて、息子が眠っていた」のような例について「主たる事象が実現する際の状況を表し、主たる事象の実現のされ方を表現しているものの、もはや、主体の様態的なあり方とは言えないだろう」「変化後の対象のあり様が存続し、主たる事象とともにより大きな事象を作ることによって、〈付帯状態〉を形成する」と述べる(仁田1995:101)が、主体変化動詞の場合に比べて具体的な意味記述は行なわれていないように思われる。
- 11) 吉永(2008:40)では、付帯用法で選択されにくい動詞のタイプの一つとして主体動作客体変化動詞を挙げ、「殻を剥いて旨そうに食べた」のような例について「付帯節が最終目的を表す主節動作の方法手段になっている場合が多く、これらはより継起的なものとして付帯用法に入れられない」と述べる。付帯か継起かという大ききくは時間関係において対立する分類法に対して、本稿は時間関係の異なりを認めつつ「最終目的を表す主節動作の方法手段」のような意味的側面を積極的に取り上げようとするものである。
- 12) あるいは(a)(b)を「付帯状態」「継起」のいずれかにまとめて分析することも不可能ではないかもしれない。しかし、時間関係の異なりと意味の共通性の両方を視野に入れるならば、どちらも十分ではない。まず、現実においてはシテ形式の動作が主たる動作に先行するのはどちらも同じであると考えれば、どちらも「継起」になる。しかしシテ形式が「主節の事象の実現のされ方(仁田1995:93の定義)」を表すという「付帯状態」的な側面は焦点にならず、時間的なものに留まらない意味関係は取り出しにくい。逆に、「付帯状態」の特徴が「継起」の場合に排除されるわけではない(客体の結果状態が「時間的に同存」し、主たる事象の実現のし方を表す点で両者が同じである)と考えれば、どちらも「付帯状態」になる。しかし、二

つの分類が互いに重なり連続するといっても、継起性を本質的な特徴とする「継起」に対して、「付帯状態」のある場合には「継起」性があるといとする（つまり、時間関係で対立する両者を時間関係で対立するカテゴリーの一方にまとめる）ような位置づけには、何らかの根拠が必要になるだろう。本稿の目的はこの二分法の精密化ではないため、この点には立ち入らない。

13) 次のような例では主要な動作の実現のための動作が複数回行なわれることから、主体の動作の側面が表されていると言えるかもしれない。しかし、やはり二つの動作の単なる同時的進行を表すのではない。「薪をくべる」「半紙を貼る」という動作が複数回行なわれたとしても、そのつど客体の結果状態がともなっている。また手段と動作、材料と生産のような他にはない意味関係がある点でも特殊であると言える。

- ・まだストーブもつけずに、囲炉裏に薪をくべて暖を取っている。(泥流地172)
- ・耕作は取って来た柳の枝に、半紙を貼って高張提灯を作っている。(泥流地194)

14) 基本的なヲ格名詞は文中の一つであるが、「それを」のような指示代名詞がある場合もある。

- ・洪作が手足を洗って応接室へ戻ると、金枝と藤尾は蓄音機のレコード盤を引き出して、それを見ていた。(夏草下005)

15) このほか、カラ格名詞をともなう例もみられた。共通の客体が、カラ格名詞が表す「でどころ」とともに、文の中に導入されている。

- ・向い側には新聞をひろげた中年の仏蘭西人が腰かけている。時々横においた袋からキャンマンベールをはさんだパンをとりだして齧っている。(留学019)

16) これは仁田(1995:101)が主体動作客体変化動詞による「付帯状態」の例として挙げている例(38)である。下線のつけ方は筆者が調整した。

17) 次のような場合については、もはや客体の結果状態が主たる事象のために準備されたものとは言えず、単に付随する事象ということになるだろう。定形動詞は表情や思考活動を表しているが、その理由や内容を示す部分はシテ形式と定形動詞を含む一文の外にある。二つ目の例では、先行する会話文からナイフを構えた状態で微笑むことの意味は理解できるものの、やはり客体の結果状態が主たる事象の実現のために効いている、という関係ではない。しかし、このような場合はごく少数である。

- ・タクシーは遅く、CBはすぐにちかづいてしまう。動力性能が極端に違くと、案外尾行はしにくいものだ。タケはアクセルを八分の一程度開いて、考えこんでいた。  
冴子と飯塚は、由子の店の一階の喫茶店の陰で抱き合っていた。  
あのときタケは、おもわず革ジャンの内ポケットのベレッタに手を伸ばしたものだ。  
無理強いされていると思ったのだ。しかし冴子はうっとりとしていた。タケには、そう感じられた。(眠り猫182)

- ・言った直後、タケは飛びのいた。タケの腹を果物ナイフがかすめた。タケは口を尖らせて声をあげる。「本気だろ！ シャレになんないよ」  
「お陰様で、お嬢様育ちだったわたくしも、あなたたち親子のおかげで、すっかり鍛えられましたの」冴子は果物ナイフを顔の高さにあげて、微笑んでいる。(猫の息002)

18) たとえば「着る、持つ」などの動詞は、再帰的に主体における変化結果としての状態を表し、服装や持ち物といった意味を表すとされるが、他動詞であるため、客体が同一になりうる。客体の同一性という特徴を取り出すことが、他のタイプの動詞の分析にも有効であることを示しているように思われる。

- ・菊川先生が、手に鐘を持って鳴らしているのだ。(泥流地160)
- ・(前略)よく見ると、女の子はみんなスカートの中に臙脂色のジャージを穿いて、膝までたくしあげていた。(私の男219)

**用例出典** 本稿中の用例として挙げたもののみ、単行本の刊行年代順に挙げる。

梅崎春生 (1946) 『桜島・日の果て』新潮文庫 (1951) / 檀一雄 (1950) 『リツ子・その愛』『リツ子・その死』新潮文庫 (1950) / 林芙美子 (1951) 『浮雲』新潮文庫 (2003) / 川端康成 (1954) 『山の音』新潮文庫 (1957) / 井上靖 (1964) 『夏草冬濤 (上・下)』新潮文庫 (1989) / 遠藤周作 (1965) 『留学』新潮文庫 (1968) / 井伏鱒二 (1966) 『黒い雨』新潮文庫 (1970) / 三浦綾子 (1977) 『泥流地帯』新潮文庫 (1982) / 三浦哲郎 (1984) 『白夜を旅する人々』新潮文庫 (1989) / 花村萬月 (1990) 『眠り猫』新潮文庫 (2004) / 桐野夏生 (1993) 『顔に降りかかる雨』講談社文庫 (1996) / 遠藤周作 (1993) 『深い河』講談社文庫 (1996) / 花村萬月 (1994) 『猫の息子—眠り猫Ⅱ—』新潮文庫 (2004) / 村上春樹 (1994) 『ねじまき鳥クロニクル 第1部 泥棒かささぎ編』新潮文庫 (1997) / なかにし礼 (2001) 『赤い月 (上)』新潮文庫 (2003) / 三浦しをん (2006) 『まほろ駅前多田便利軒』文春文庫 (2006) / 桜庭一樹 (2007) 『私の男』文春文庫 (2010)

### 参考文献

- 井上和子 (1983) 「第1部第1章第8節 文の接続」井上和子 (編) 『講座 現代の言語1 日本語の基本構造』 pp.127-151, 三省堂.
- 内丸裕佳子 (2006) 「動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に—」『日本語の研究』2-1, pp.1-15, 日本語学会.
- 遠藤裕子 (1982) 「接続助詞「て」の用法と意味」『音声・言語の研究』2, pp.51-63, 東京外国語大学音声学研究室.
- 大鹿薫久 (1986) 「「て」接続考」『叙説』12, pp.219-228, 奈良女子大学文学部国語国文学研究室.
- 奥田靖雄 (1984) 「連用、終止、連体…」『ことばの研究・序説』 pp.53-66, むぎ書房. (初出は1975年『宮城教育大学国語国文』6, pp.22-30, 宮城教育大学国語国文学会.)
- (1989) 「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい—」『ことばの科学』2, pp.11-47, むぎ書房.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
- 加藤陽子 (1995) 「テ形節分類の一試案—従属度を基準として—」『日本語教育論集 世界の日本語教育』5, pp.209-224, 国際交流基金.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房.
- (2002) 「日本語の文の成分」『現代日本語講座 第5巻 文法』 pp.101-119, 明治書院.
- 言語学研究会 (編) (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房.
- 坂井菜緒 (2000) 「動詞の中止形と後続する動詞との時間的關係」『武蔵野女子大学文学部紀要』1, pp.73-85, 武蔵野女子大学文学部紀要編集委員会.
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房.
- 高橋太郎 (2003) 「第8章 動詞が述語でなくなるとき」『動詞九章』 pp.221-257, ひつじ書房.
- 寺村秀夫 (1981) 『日本語教育指導参考書5 日本語の文法 (下)』国立国語研究所.
- 成田徹男 (1983) 「動詞の「て」形の副詞的用法—「様態動詞」を中心に—」渡辺実 (編) 『副用語の研究』 pp.137-158, 明治書院.
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐって」仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』 pp.87-126, くろしお出版.
- 益岡隆志 (2014) 「日本語の中立形接続とテ形接続の競合と共存」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編) 『日本語複文構文の研究』 pp.521-542, ひつじ書房.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店.

——— (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店.

三原健一 (2011) 「テ形節の意味類型」 『日本語・日本文化研究』 21, pp.1-15, 大阪大学日本語文化教育センター.

宮島達夫 (1965) 「いくつかの文法的類義表現について」 国立国語研究所 『国立国語研究所論集 2 ことばの研究 第2集』 pp.75-106, 秀英出版.

吉田妙子 (2012) 『日本語動詞テ形のアスペクト』 晃洋書房.

吉永尚 (2008) 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』 和泉書院.

(博士後期課程学生)

(2014年8月21日受付)

(2014年10月3日修正版受付)

(2014年10月16日掲載決定)